旧制山形高等学校の学徒出陣

小　幡　圭　祐

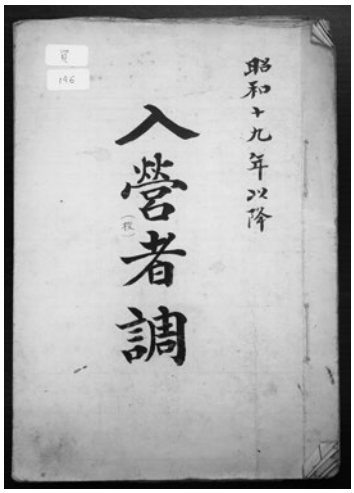
はじめに

筆者が学芸研究員をつとめる山形大学附属博物館では、2020年（令和２）に山形大学の前身の一つである旧制山形高等学校の創設から100年となることを受けて、ふすま同窓会（旧制山形高等学校・山形大学文理学部・人文学部・理学部・人文社会科学部の同窓会組織）と共催で特別展示の開催を計画していた。しかし、新型コロナウィルス感染症の影響により延期を余儀なくされ、2021年（令和３）に現在の山形大学小白川キャンパス（従前は旧制山形高等学校校地）の誕生から100年となることから、特別展「小白川キャンパスの100年　旧制山形高等学校から山形大学への歩みと100年後の山大生に伝えたいこと」の開催へと計画を変更した（コロナ禍によりこちらも延期）。本稿は、特別展の準備過程で得た知見[1)]のうち、旧制山形高等学校の学徒出陣の実態についての知見の共有を図るものである。

旧制高等学校の学徒出陣の先行研究として、いわゆるナンバースクールについては、西山伸による第三高等学校の分析[2)]、薄田千穂を中心とする第五高等学校の分析[3)]がある。また、ナンバースクール以外だと秋山博志による佐賀高等学校の分析[4)]が挙げられる。しかし、西山も指摘するように、大学などに比して旧制高等学校における学徒出陣の実態解明は立ち遅れの現状にある。旧制山形高等学校についても、その例にもれず、同窓会の記念誌に掲載された回想に個別の生徒の動向が残されるほかは、出陣学徒数や戦没者数など学徒出陣の具体像は明らかにされてこなかった。事例の積み重ねが求められている現状と言える。

よって本稿では、旧制高等学校における学徒出陣の全体像解明の第一歩として、旧制山形高等学校における学徒出陣の数や戦没者の動向など、基礎的な事実を解明することを目的とする。ふすま同窓会には旧制山形高等学校に関する公文書が残されていることを豊田龍平がすでに明らかにしており[5)]、企画展の準備も兼ねてその文書を実見したところ、学徒出陣や勤労動員関係の存在を確認することができた。この中でも、1943年（昭和18）12月の出陣学徒の『出陣学徒芳名帳』（【図１】、以下『芳名帳』）と、1944年（昭和19）以降に入営した生徒の情報を記した『昭和十九年以降　入営者調』（【図２】、以下『入営者調』）によって、1943年以降の学徒出陣の基礎的な情報はほぼ明らかにすることが可能である。また、これまで回想でのみ知られてきた戦没者の動向についても、『入営者調』に掲載された入隊情報や更なる史料を補足することで可能な限り具体相を明らかにしたい。

【図１】出陣学徒芳名帳

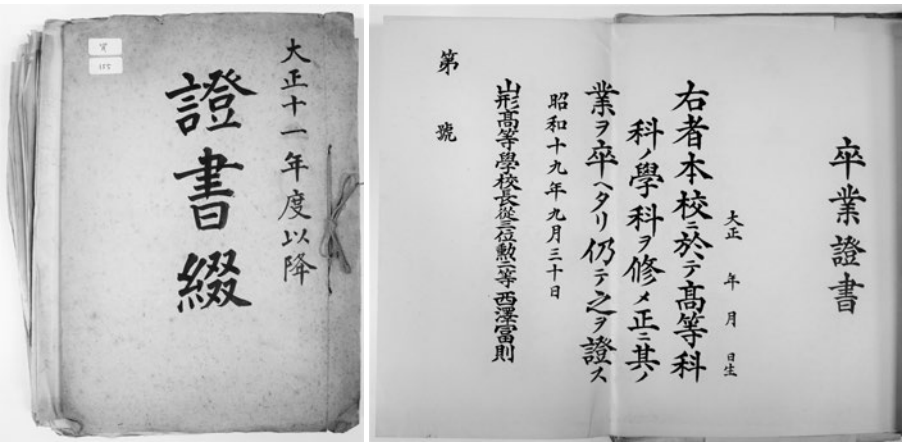


【図２】入営者調

1　繰り上げ卒業と学徒出陣

1937年（昭和12）にはじまる日中戦争の拡大に伴い、戦力を大量かつ緊急に確保する点から、1941年（昭和16）10月16日に勅令第924号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」によって、大学学部・大学予科・高等学校高等科・専門学校・実業専門学校の在学年限が６か月短縮可能となり、また、1941年度の卒業生について、同日の文部省令第79号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ昭和十六年度臨時短縮ニ関スル件」により、大学学部・専門学校・実業専門学校に加え、高等師範学校・女子高等師範学校・実業学校などの在学年限が３か月短縮されることとなった。11月１日には、1942年度の卒業生について、文部省令第81号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ昭和十七年度臨時短縮ニ関スル件」により、大学学部・専門学校・実業専門学校・高等師範学校・女子高等師範学校・実業学校に加え、大学予科・高等学校高等科においても在学年限が６か月短縮されることとなった。高等学校の在学年限は３年であるから、例えば1940年４月に入学の生徒は本来であれば1943年３月卒業予定となるが、６か月の短縮により1942年９月卒業となる。1943年（昭和18）１月20日には、勅令第38号により高等学校令の改正がなされ、1943年度入学者から在学年限は２年に短縮された（1946年３月卒業予定は1945年３月卒業）[6]。

旧制山形高等学校の場合は、1942年９月30日に第21回生191人、1943年９月30日に第22回生191人、1944年９月30日に第23回生245人、1945年３月６日に第24回生274人が繰り上げ卒業となっている[7]。ふすま同窓会所蔵の文書の中に『大正十一年度以降　証書綴』と表紙に書かれた簿冊が存在し、1942年９月・1944年９月・1945年３月の卒業生に交付されたと考えられる卒業証書の雛形が存在している（【図３】）。



【図３】証書綴と1944年９月の卒業証書の雛形

また、1943年10月２日の勅令第755号「在学徴集延期臨時特例」により、それまで在学中は軍隊への徴集を猶予されていた特例を廃止し、20歳に達した全ての学徒は徴兵検査を受けることとなったが、11月13日の陸軍省令第54号「修学継続ノ為ノ入営延期等ニ関スル件」ならびに陸軍省告示第54号「入営（召集）ヲ延期スベキ学校及入営（召集）ヲ延期スベキ期間」にて、理・工・医系の大学学部、農学部の一部、高等学校高等科の理科、理・工・医系の大学予科、高等師範学校、師範学校などがその対象からは除かれ、引き続き入営を延期されることとなった。

すなわち、高等学校の文系の生徒が学籍を有するまま、戦地に赴くこととなったのである。同年12月24日には、勅令第939号「徴兵適齢臨時特例」が公布され、従来満20歳であった徴兵適齢が満19歳へと引き下げられた。さらに、1945年２月８日の陸軍省令第６号「昭和十八年陸軍省令第五十四号中改正」によって、高等学校の理系の生徒の入営延期も解除されることとなったが、同日の陸軍省告示第４号「入営（召集）ヲ延期スベキ学校及入営（召集）ヲ延期スベキ期間」では、在学生は引き続き入営延期とされ、1945年４月の新入生から延期が停止されることとなった[8)]。

旧制山形高等学校の場合、1943年11月13日に学寮において学徒出陣壮行会が、20日に学校にて出陣学徒壮行式が行われ、12月１日に文科生37名が第１回学徒出陣を行った。1944年８月にも出陣学徒壮行式・生徒総会が行われ、1945年４月にも学徒総決起大会が行われている[9)]。

2　旧制山形高等学校の実態

先述した『芳名帳』は、1943年12月の学徒出陣を前に記念として作成されたもので、西澤冨則学校長と文科生37名・理科生１名の署名がなされている。出陣学徒壮行式の写真（【図４】）、出陣生徒の集合写真（【図５】）のほか、一部の生徒については生徒個人の写真も掲げられている。また、『入営者調』は、1944年以降に入営した生徒（一部教員）のクラス・氏名・部隊名・入隊月日・本籍地・除隊月日を記されており、部隊の転属・復員などの追加情報も記されている。『芳名帳』ならびに『入営者調』から、1943年12月以降に入営した生徒・教員の情報をまとめたものが【表】である。以下、この【表】に基づき、旧制山形高等学校の学徒出陣の状況をおさえていきたい。

【図４】出陣学徒壮行式

【図５】出陣生徒の集合写真

まず、入営者の総数は教員も含め全136名（生徒134名・教員２名）である。このうち、実際に軍に入隊したものは125名（生徒124名・教員１名）であった。入隊時期に着目してみると、1943年の一斉入隊が38名・1944年以後の入隊が86名となり、後者の方が圧倒的に多い[10)]。入隊しなかった者・除隊した者の理由としては、病死・即日帰郷・入隊直後召集解除・入隊延期などと記されている。

次に、実際に入隊した生徒のうち文・理の別を見ると、文科116名・理科８名となっている。その多くは文科であったが、理系生徒も学徒出陣を行っていたことが知られる。入隊時期にも

【表】旧制山形高等学校の入営者一覧

仮番号	氏名	身分	入学年	卒業年月	クラス	入隊年月日	部隊名	備考	典拠史料
1	薄木定一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
2	大場隆道	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
3	金子修	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
4	木村勇吉	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
5	坂内誠一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
6	土野周造	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
7	寺田正二	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
8	濱田直太郎	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
9	八角常雄	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
10	山本節夫	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
11	山本正臣	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
12	菊地茂	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
13	小泉博資	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
14	小林英夫	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
15	佐々木榮助	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
16	佐藤精一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
17	齋藤三郎	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
18	塩川隆	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
19	杉山進	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
20	東川敬	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
21	永井潔	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
22	長澤正	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
23	西島弘	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日		シベリアで抑留中に死亡（『われらここに聚ふ』）	芳
24	庄野新	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
25	桑原源次	生徒	昭和18年	昭和22年３月	文一ノ二	昭和18年12月１日	横須賀・東部七五部隊		芳・入
26	落合健	生徒	昭和18年	昭和23年３月	文一ノ二	昭和18年12月１日	山形・北部十八（五十九）部隊	昭和21年６月11日復員（『昭和二十一年五月生徒本籍・現住所・下宿・出身中学調書　訓務課』ふすま同窓会所蔵）	芳・入
27	笹田正保	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
28	内藤淳一郎	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
29	桑原清	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
30	脇坂泰治	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
31	高力一雄	生徒	昭和16年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
32	三上七郎	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ一	昭和18年12月１日			芳
33	矢野正三	生徒	昭和18年	昭和22年３月	文一ノ二	昭和18年12月10日	横須賀第二海兵団		芳・入
34	木村良一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
35	小松猛	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
36	今井田英男	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文二ノ二	昭和18年12月１日			芳
37	門脇達男	生徒	昭和18年	昭和22年３月	文一ノ二	昭和18年12月１日	山形・北部五十九部隊猪俣隊		芳・入
38	植木脩太	生徒	昭和16年		理二甲一	昭和19年２月10日	石巻・東部九十部隊	昭和20年９月８日復員	芳・入
39	善積六郎	生徒	昭和16年		理二乙二	昭和18年12月１日		戦死（『昭和二十年十二月生徒本籍・現住所・下宿・出身中学調書２訓務課』ふすま同窓会所蔵）	入
40	和泉田洋	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年８月８日	三重県鈴鹿・三重海軍航空隊	福島県東白川郡石井村戸塚へ疎開	入
41	手塚常男	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年９月５日	宇都宮・東部四十部隊→納第二八八〇部隊新満隊（四）（昭和19年９月16日通知あり）		入
42	斎藤賢	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年９月５日	宇都宮・東部三十六部隊		入
43	宮崎五郎	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年８月10日	三重海軍航空隊		入
44	豊島吉治	生徒	昭和18年		文二ノ一	昭和19年３月１日	外地軍属→ビルマ派遣軍森第七九〇〇部隊（せ）（昭和20年１月22日）		入
45	磯崎光正	教員	―	―	助手	昭和19年９月５日	山形・北部五十九部隊		入
46	浅田英作	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年９月５日	東部六三部隊		入
47	渡里杉一郎	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	仙台陸軍予備士官学校（歩兵）	即日帰郷（昭和20年２月13日通知）	入
48	井上弘	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
49	吉田五郎	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入

仮番号	氏名	身分	入学年	卒業年月	クラス	入隊年月日	部隊名	備考	典拠史料
50	草野隆夫	生徒	昭和19年		理一乙二	昭和19年10月１日	海軍経理学校	退学	入
51	上田正臣	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	豊橋陸軍第二予備士官学校（歩兵）		入
52	稲垣倉造	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
53	阿部肇	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	仙台陸軍予備士官学校（歩兵）		入
54	江頭悦郎	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年１月５日	広島陸軍船舶練習部（取消）→香川県三豊郡豊浜町船舶幹部候補生隊（船舶）		入
55	嶽山幸一	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
56	曽根保一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
57	門傅勝二郎	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	豊橋陸軍第一予備士官学校（野砲）		入
58	日野英男	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	豊橋陸軍第一予備士官学校（野砲）		入
59	鈴木貞敏	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（山砲）		入
60	佐治守夫	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	神奈川県高座郡大野村・陸軍通信学校（補欠採用）		入
61	佐藤久衛	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	豊橋陸軍第一予備士官学校（野重）		入
62	高橋俊三	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
63	坪井良一	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年10月10日	豊橋陸軍第二予備士官学校（歩兵）		入
64	佐藤恒隆	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	前橋陸軍予備士官学校（山砲）		入
65	白井俊隆	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年１月10日	四ツ街道・陸軍野戦砲兵学校（野重）		入
66	佐々木雄吉	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和20年１月10日	東京目黒・陸軍輜重兵学校（輜重）		入
67	五藤良明	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年１月10日	立川航空整備学校（航空（武））		入
68	稲毛重善	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年９月30日	武山海兵団		入
69	加賀十寸穂	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年９月10日	武山海兵団		入
70	工藤利雄	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年９月23日	土浦航空隊		入
71	沢原正夫	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年９月27日	海軍予備学生　滋賀海軍航空隊		入
72	大久保恒明	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日９時	仙台陸軍予備士官学校		入
73	笹本義忠	生徒	昭和18年		理二乙一	昭和19年10月１日	東部第六部隊	昭和20年３月６日急性肺炎で死去	入
74	佐藤三郎	教員	―	―	教授			即日帰郷	入
75	時野谷蓁	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和20年１月10日	四ツ街道・陸軍野戦砲兵学校（野戦重砲兵）		入
76	工藤邦一	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和20年１月10日	目黒区上目黒八丁目・陸軍輜重兵学校（輜重兵）		入
77	近岡伊一	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年10月10日	豊橋市畑町・豊橋陸軍第一予備士官学校（歩兵）		入
78	多勢吉郎	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月10日	豊橋市西口町・豊橋陸軍第二予備士官学校（歩兵）		入
79	高山伊弘	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和19年10月10日	豊橋市西口町・豊橋陸軍第二予備士官学校（歩兵）	即日帰郷	入
80	小嶌知之	生徒	昭和17年	昭和19年９月	文三	昭和20年１月10日	神奈川県高座郡大野村・陸軍通信学校（通信兵）		入
81	間中正明	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月10日	福岡県三井郡高良内村・久留米陸軍予備士官学校（野砲兵）		入
82	御子柴恒男	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月10日	群馬県桃井村・前橋陸軍予備士官学校（歩兵）		入
83	鈴木平八郎	生徒	昭和19年	昭和23年３月	文一	昭和19年11月10日	東京・東部第六部隊		入

仮番号	氏名	身分	入学年	卒業年月	クラス	入隊年月日	部隊名	備考	典拠史料
84	杉浦穆	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年10月20日	大阪府和泉町・中部第二十七部隊→満州第八二九軍事郵便所気付・満州第八七一部隊岸田隊	旧ソ連に抑留中に沿海地方にて死去（厚生労働省『旧ソ連邦及びモンゴル抑留中死亡者名簿』）	入
85	富沢邦夫	生徒	昭和19年	昭和23年３月	文一	昭和19年10月20日	若松連隊・東部二十四部隊樋口隊		入
86	黒沢正	生徒	昭和19年		文一	昭和19年12月１日	弘前市外・東部六十九部隊（野砲）		入
87	茂木滋彦	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和19年12月20日	中支峯八一〇〇部隊（東京赤坂・仮入営東部第六部隊）（歩兵）		入
88	奥村孝治	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年12月15日	旭川・北部第四部隊（歩兵）	即日帰郷（昭和19年12月21日付）	入
89	和田二三夫	生徒	昭和18年		理二甲三	昭和19年12月21日	新発田・東部二十三部隊	入隊直後召集解除	入
90	杉田勝美	生徒	昭和18年		理二乙一	昭和20年２月10日	滋賀県・中部九十八部隊	入隊延期	入
91	相田寿夫	生徒	昭和18年	昭和20年３月	理二乙二	昭和19年12月25日	山形・東部五十九部隊		入
92	大内進	生徒	昭和18年		文二	昭和20年２月10日	青森・東北部第五十七部隊吹田隊		入
93	清水幸夫	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和19年12月25日	千葉県市川市国府台・東部第七十三部隊（第二国民）	即日帰郷	入
94	濱田徳夫	生徒	昭和18年		文二	昭和20年２月10日	徳島市蔵本町・中部第八十三部隊（取消）→満洲第七一二部隊河田隊（歩兵）		入
95	若林茂良	生徒	昭和18年	昭和20年３月	理二乙二	昭和20年１月５日	福島県会津若松（取消）→三重県・中部三十八部隊		入
96	廣谷香樹	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年１月17日	東部第廿七部隊（朝鮮第八部隊要員）		入
97	西田馨	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年２月15日	大阪集合・満洲第一〇一四部隊（満州第八一五軍事郵便所気付・よ隊……到着通知あり）（野戦重砲兵・水戸連隊区より通知）		入
98	狩野勝郎	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年２月16日	東部二十二部隊上野隊		入
99	犬伏清重	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年２月10日	中部第八十三部隊金光隊		入
100	松田義壽	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年２月10日	満洲第五〇八軍事郵便所気付・第二〇一部隊富樫隊	８月14日に大石塞にて戦死（『満洲第二〇一部隊の悲劇』）	入
101	伊藤正彦	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年２月１日	旭川市・旭川第九部隊（輜重兵）	東北大法へ入	入
102	笹脇克己	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年１月20日	広島市皆実町・暁第一六七一〇部隊シ隊		入
103	鈴木馨	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年２月５日	東京中央郵便局私書箱第二三七号・東部晴第一〇八二部隊（ア）（高射砲兵）		入
104	寺田玉樹	生徒	昭和18年		文二	昭和20年２月15日	広島市集合・満洲三七六五部隊（取消）→海軍予備生徒に採用		入
105	菊地正之	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年２月１日	東部第二十二部隊		入
106	丹野義章	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年３月15日	北海道西西郡大正村上更別・熊第九二〇三部隊		入
107	中村猛夫	生徒	昭和18年		文二ノ二	昭和20年２月		即日帰郷	入
108	新実孝吉	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年４月１日	海軍予備生徒　滋賀海軍航空隊		入
109	高橋嘉一	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年３月15日	東北部第一九五一部隊	昭和20年３月20日帰郷発令	入
110	河村新一	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年３月20日	海軍予備生徒　滋賀海軍航空隊		入
111	小山博也	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年３月20日	広島県佐伯郡・大竹海兵団（予備生徒）→山口県熊毛郡平生局区内水場局気付・海軍潜水学校柳井分校→水戸市・東部三十七部隊安達隊（昭和20年８月13日）		入

仮番号	氏名	身分	入学年	卒業年月	クラス	入隊年月日	部隊名	備考	典拠史料
112	高橋徹	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年３月25日	東北部（山形）五十九部隊→秋田へ		入
113	新関恒助	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年３月25日	東北部（山形）第五十九部隊		入
114	鎌田紫都夫	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年３月25日	秋田市・東北第五十八部隊		入
115	木塚健三	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年３月28日	東部第三十六部隊渡辺勝隊（歩兵）		入
116	畠山民夫	生徒	昭和18年	昭和22年３月	文二	昭和20年３月25日	横須賀市・東部第七十五部隊（歩兵）		入
117	川又友三郎	生徒	昭和18年		文二	昭和20年３月24日	水戸連隊三十七部隊馬場隊		入
118	杉山敏	生徒	昭和18年	昭和23年３月	文二	昭和20年３月26日	千葉県佐倉町・東部第六十四部隊		入
119	結城茂	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年４月７日	山形市・東北部五十九部隊→青森県三戸郡川内村上市川郵便局気付・護弘第二二八五九部隊船越部隊岡田隊	昭和20年９月12日復員	入
120	山﨑裕康	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年３月27日	会津若松市・東北第二十四部隊		入
121	野田順吉	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ一	昭和20年３月２日	小倉市・西部第七十二部隊→北支派遣固第六四五九部隊興津隊（昭和20年５月８日）		入
122	鏡眞之助	生徒	昭和18年		文二	昭和20年４月６日	東部第十二部隊→東京都世田ヶ谷区下馬町・武蔵第一四二四五部隊高隊三班（陸軍二等兵）	20年９月９日復員	入
123	田口道友	生徒	昭和18年		文二	昭和20年３月29日	千葉県匝瑳郡八日市場郵便局気付・護隊第二二六〇三部隊土井隊（歩兵）		入
124	竹中宏一	生徒	昭和20年		理一甲一	昭和20年５月10日	青森・東部九十三部隊	即日帰郷（昭和20年５月10日）	入
125	湊昇	生徒	昭和18年	昭和20年３月	文二ノ二	昭和20年	北支派遣将一五七五九部隊		入
126	伊狩隆蔵	生徒	昭和20年		文一ノ二	昭和20年６月５日	新潟県・新発田連隊		入
127	高橋義大	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年６月10日	高崎市・東部第三十八部隊福島隊	昭和20年９月16日復員	入
128	河合和男	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年６月10日	水戸市・東部第三十七部隊		入
129	小野口精彦	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年５月10日	宇都宮・東部三十六部隊赤城鈴木隊	昭和20年８月29日復員	入
130	石沢博司	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年７月20日	東京都世田ヶ谷区下馬町・東部第一八六部隊		入
131	沢峯太	生徒	昭和19年	昭和23年３月	文二	昭和20年７月６日	京都市伏見区深草・中部百四十三部隊吉野隊		入
132	小杉山清	生徒	昭和19年	昭和20年３月	文二	昭和20年７月22日午後３時	山形・東北一三八部隊		入
133	小川利夫	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年７月17日	東部第六十二部隊		入
134	平野徳夫	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年７月17日	東部第六二部隊		入
135	齋英男	生徒	昭和19年	昭和22年３月	文二	昭和20年８月１日	浜松市・東海五五四部隊	昭和20年８月３日解除（８月13日葉書にて通知あり、動員先は宮城県地方課に勤務の見込なる由）	入
136	野田斉一	生徒	昭和20年	昭和23年３月	文一	昭和20年８月４日	水戸市・東部四十二部隊		入

注：記載事項については断りのない限り典拠史料に拠り、入学年・卒業年月については『ふすま同窓会会員名簿』などにより追記した。典拠史料は下記の略称を用いた。
芳＝『出陣学徒芳名帳』　入＝『昭和十九年以降 入営者調』（いずれもふすま同窓会所蔵）

着目すると、1943年12月の一斉入隊者38名の内訳は文科37名、理科１名である。ちなみに、『芳名帳』にも文科37名・理科１名の署名があるが、この理科の生徒は1943年12月に一斉入隊はしておらず、別の理科１名が入隊していることが『入営者調』より知られる。なお、実際には入隊しなかった、あるいは除隊した生徒10名の内訳は、文科６名・理科４名で、出陣学徒の比率と比較すると理科の割合が多い印象である。

生徒の入営先（実際には入隊しなかった者・除隊した者も含む）については、『入営者調』のみに記載されているため、『芳名帳』に名前が見える生徒は『入営者調』に記載がない場合は不明である。また、実際には入隊しなかった者の一部も記載がないものがある。陸軍・海軍の別は、陸軍87名・海軍12名と陸軍が圧倒している。陸軍のうち、予備士官学校など学校（船舶幹部候補生隊も含む）に配属されている者が29名、直接部隊に配属となっている者が58名である。前者はおおむね1944年５月６日勅令第372号「陸軍兵科及経理部予備役将校補充及服役臨時特例」で新設された、兵としての経験を持たぬまま下士官として採用し、予備役将校に任用するという特別甲種幹部候補生制度によるものである[11]。部隊の配属については、内地（朝鮮も含む）が52名、外地（中国・満洲・東南アジア）が６名である。内地に派遣されたもののうち、外地の部隊に転属となった者が２名おり、これを含む８名の外地配属先は中国３・満洲４・東南アジア１と満洲が最も多く、中国がこれに次ぐ。ちなみに、入営した教員１名（助手）は陸軍で内地配属である。海軍の場合は、海軍経理学校に所属した者が１名いるほかは、海軍航空隊あるいは海兵団に所属している。１名のみ海兵団に所属後、海軍潜水学校を経て陸軍に転属しているケースがある。

3　旧制山形高等学校の戦没者

旧制山形高等学校生徒の戦没者について、今回の調査で確認できたのは４名である。このうち３名は文科の生徒で、いずれも学籍を有するまま入隊し、任務についている間に自動的に卒業とされ、その後戦地もしくは抑留先で命を落としている。任地はいずれも外地（満洲）であったと考えられる。残りの１名は理科の生徒であるが、入隊先などの情報は不明で、今後の調査が待たれる。

(1) 西島弘（仮番号23）

西島は文科の生徒で、1943年（昭和18）の一斉入隊組の一人である。西島については、学寮の幹事総代として一緒に仕事をしていた加賀谷誠一（第23回理甲卒）の手記[12]に登場する。

> 戦局はいよいよ厳しくなり、九月二十三日の東条首相の放送があって、文科系の学徒徴兵延期は停止された。ついに学徒出陣の時がきたのである。十一月十三日に、学寮で壮行会が開かれた。代表して阿部肇が送辞を読んだ（自筆の巻き紙が私の古本の間から発見された）。すなわち「……いまだ動揺の余震絶無とは言いがたけれど…男子の面目これに過ぐることはなしと観ぜられ…母校の名誉と国家の名誉とを担って山高生らしく…」とあった。幹事総代の一人である西島（弘）は征き、聞くところによるとシベリアに抑留され、収容所の横暴に抗議し、酷寒の野外に立たされて死んだ。阿部は戦後しばらくしてこの世を去った。私は十九年の秋、二年半に短縮された高校生活に別れをつげ、やがて激しい空襲にさ

らされる東京に向かって思い出の山形を後にした。理科系であるために徴兵延期で勉強ができたのである。

西島については『芳名帳』に名前が見えるものの、『入営者調』に掲載がなく、入営後の状況について新しく判明した事実はない。ただし、入営前の活動の動向についてはわずかながら動向が知られる。

1940年（昭和15）11月６日、文部省からの学校修練組織強化の要請を受けて、従前の校友会・実践会は解散し、報国団が成立した。報国団規則によれば、「報国精神ニ基キテ学校一致心身一体ノ修練ヲ図リ校風ヲ作興スルヲ以テ目的トス」るとされ、校長を団長とし、そのもとに総務部・鍛錬部・文化部・生活部が置かれた。従前の校友会は、集団課（勤労・体力・警防班）・武道課（柔道・剣道・弓道班）・国防課（騎道・射撃・銃剣道班）・体育課（野球・庭球・籠球・蹴球・排球・競技・雪艇・山岳・体操・卓球班）からなる鍛錬部、文芸課（文学・芸術・弁論班）・学術課（文科・理科班）・修養課（修養・研究班）からなる文化部に再編されている[13)]。1943年に鍛錬部は柔道・剣道・弓道・籠球・蹴球・陸上運動・雪滑・行軍・体操・馬事・射撃・銃剣道・戦場運動・航空・海洋班に再編されていた[14)]。

西島はこのうち、航空班と海洋班に所属していた。航空班は滑空機（グライダー）の訓練、海洋班は海軍の軍艦や航空機に実際に搭乗して訓練を行うものである。『報国団誌』第４号に掲載された1943年の海洋班の活動記録[15)]に、西島の名前が見える。

◇士浦海軍航空隊合同訓練

期日　八月五―八日(月)七日間

参加者　二年　西島、福田、　一年　海藤

五日、正門より堂々の行進にて、号令台の前に整列。空に海に、堂々の進撃の歩を進め、世界戦史に不滅の金字塔を打立て、何人も知らんと欲する吾が海軍航空隊の揺籃の地に、今吾々は第一歩を印したのである、時将に十時。

開講劈頭「此の短期間中に、何物か一つ掴め」、と言はれた教官の言も、腹の底に快く響く。

水泳見学、金槌組が、笛を合図に、目を閉ぢ、顔を顰めて飛込むところも仲々味がある。

此の他に、アメリカ映画（ソロモン群島にて獲得せしもの）の鑑賞等あったが、本日は生活に不馴れの為、その方面の指導を受けて時間を過してしまった。

六日、海軍体操、実施に際しては、八分目を過ぎてからのみ力を十分に注げば、十二分に効果を上げ得るものである。人間である以上、緊張を以て、終始する事は出来ない、以て海軍の一端を知るに足るであらう。

短艇撓漕、細腕に渾身の力を込めて漕いだ後、自分達の航跡を眺める快感は、海の子ならでは味ひ得ないものである。その他に、練習生起床見学、朝礼見学、霞空見学、巡検随行、等々。

七日、所感作製、閉講式。

此の三日間の訓練は、たとへ短期間であったにしても、吾々海を持たぬ山高海洋班員にとっては幾多の貴重なる教訓があった。

死亡地から判断すると、入営先は陸軍であったと考えられるが、本人は海軍志望であったのかもしれない。

(2) 松田義壽（仮番号100）

松田も文科の生徒で、同級生の塚本哲人（第24回文乙卒）の手記[16]によりすでに名前が知られている。入学から学徒出陣、戦死に至る足取りについて、塚本の手記を補足する形で見ていきたい。

塚本は1943年４月に文科乙類に入学し、「蹴球部」（正確には蹴球班）に入部した。そこにいたのが同じく一年の松田であった。

> インターハイでの山高蹴球部の活躍をこの目で見て、魅せられたように山形にやってきた私は「サッカー高校山形部」に進学したぐらいの気持であって、入学後すぐにボールをけり始めた。この年、多くの一年生が入部したが、その仲間に文乙の松田義寿がいた。岩手県宮古の出身、端整な顔つき、やさしい心根、沈思黙行しかも剛毅果断、私の山高の思い出には必ず彼が浮かんでくる。
>
> 松田は遅れて入部を申し出たが、その直後からきわめて自立的に練習に打ち込みはじめた。ドイツ語のテストの前日でも、練習後もひとりグランドに居残って黙々とボールをけりつづける彼であった。
>
> その松田とサッカー感覚の優れた同期生の松本良二（文乙）が両インナー、私がセンターという形で、つまり、一年生がセンタースリーを組むチームで公式戦を戦ったのは、その夏、仙台の評定河原で行われた東北インカレの一回戦、対弘前高校戦だけであった。その試合を二対〇で勝って、決勝戦は福島高商と決まったのに、突然中止になってしまった。これらの記録は、どこにも残されていない。

調査の結果、『報国団誌』第４号に蹴球班の活動報告[17]が掲載されていることがわかった。

> 多事多難、忍苦の一年も明け、春四月陽春と共に我蹴球班は新に大なる力をもって練習開始。この四月から、野球、排球、庭球、卓球等の諸班は廃止され、我が班よくこの重大戦時下に存続するの意義を考ふる時、我々の責務亦大なりと云はざるべからず。我々は今後共蹴球道に没入し、精神的に肉体的に何物かを追求し、以て先輩の築きし輝かしき伝統を弥が上にも輝かさん。さて練習開始と同時に新に、江頭悦郎（中野中）山田照男（府立三中）狩野勝郎（仙台一中）塚本哲人（府立八中）松田義寿（仙台一中）松本良二（湘南中）白井俊隆（保原中）三輪光司（府立一中）藤原雅一（正則中）丹野浩（仙台一中）横田国臣（横浜一中）山本省三（府立四中）九月よりは鎌田紫都夫（秋田中）の十三名の優秀班員を得たが、学校の体錬強化により六月迄は一年生の練習事実上出来ず、二年三年のみで基礎練習、特に精神的鍛錬に努めた。六月より新入班員を加へた我々は元気百倍、苦を求むる行に全班員一丸となって突進せり。
>
> 本年度より、米沢、二高では蹴球班を廃止し、我が班としては永年の好敵手を失ひ、更に山形師範も先頃之を廃止し、この近辺には全く試合相手なく、大方の熱意に応へられぬ

が残念なるも、唯苦しみ努力して、戦時下国家の要望に応ふる覚悟なり、かくては一意努めん、一意行ぜん。

こゝに昨年十一月より現在に至る、我が班の活動を記し、反省して見む。

（中略）

◆対弘前戦（七月二十三日　於東北大グランド）

G.K. 阿部　F.B. 茂本・横田　H.B. 三輪・吉田・白井　F.W. 中村・松田・塚本・松本・澤原

山高 2 {1-0　1-0} 弘高 0

十時二十五分試合開始、曇天にして涼し。前半最初、一年生初出場のためあがり、苦戦。十分にして幾分盛り返す。二十分塚本のチャーヂボール気味のシュート得点となり、一対〇で前半を終わる。後半中盤戦を続け、やゝもすると押され勝ちなり。弘前C・H・中島の奮闘見るべきあり。彼の放ったハーフシュート、前後半通じて十五本に及べり。後半二十七分、三輪右より切り込み、シュートしたものが、R・I・和田の足に当りゴール。後半一対〇。

我が軍の勝利は偶然とも云ふべく、唯ファイトに於て見るべきものありと云へば云へる。弘前は最後の突込みのなき点に敗因あり。

◆対仙台高工戦（二十三日　於東北大グランド）

仙台高工棄権のため不戦勝。弘前に勝っただけで非公式なるも東北優勝となる。

尚、新潟、福島との戦。予定するも実行不可能。今後共努力する事のみを誓ひ、筆をおく。

塚本の手記に話を戻す。手記では、1943年の徴兵猶予の廃止から入営、戦死に至るエピソードが続く。

その年の秋、文系の徴兵猶予が廃止された。そのラジオ放送を大石田での軍事教練中に聞かされた。学徒出陣にはじまるインターハイのない冬がすぎ、赤痢で大さわぎをした春になり、秋には富山県下に勤労動員で出かけた。昭和一九年の二年生の春から富山で冬をむかえるまで、それはまことにあわただしかった。

その冬、富山はとくに雪が多かった。風雪の中で、つぎつぎと赤紙のきた仲間を戦場に送らねばならなかった。松江の陸軍病院に入院中のご令兄（現東北電力副社長松田彰氏）に面談して入営するという松田を富山駅頭に送ったのは、激しい吹雪の日であった。別れぎわに何を話しあったかは記憶にない。しかし、改札口に立って見送る私を全くふりかえろうともせずに、プラットホームに足はやに消えていったことだけは、鮮やかに覚えている。その後姿が、今も眼底に焼きついて離れない。

本郷の研究室にいるころ、終戦間ぎわのソ連軍と北満での戦闘で行方不明になったと聞いて心がふるえた。そのことを私なりに確かめもした。仲間を思うやさしさをもち決してふりむこうとしない、まさに松田らしい最後であると思った。えらいヤツだとあらためて尊敬を覚えたのであった。無事を確信するご母堂をはじめ、ご近親の方々のお苦しみも、うかがい知ることができた。

『入営者調』によると、松田は1945年２月10日に入隊、満洲第201部隊富樫隊に配属となっていた。満洲第201部隊に所属していた隊員によって編まれた『満洲第201部隊の悲劇』によると、同部隊は1945年８月のソ連の満洲進攻により多数の死傷者を出したことが知られる。同書に掲載された「日ソ開戦時における第百七師団主要幹部一覧表（昭和二十年八月九日現在）」からは、第107師団歩兵第177連隊に凪20001（満201）部隊が所属しており、第２大隊７中隊長に富樫城蔵陸軍中尉の名前があることが確認できた。また、同じく同書に掲載された「満洲第201部隊戦没者名簿」の中に松田の名前があり、1945年８月14日に大石寨（現在の中国内モンゴル自治区）にて死亡したことが記されていた[18)]。

満洲第201部隊は1943年10月に独立混成歩兵第７連隊として弘前市において編成されたもので、満洲防衛を任務としていた。1944年６月に第107師団がアルシャンにおいて新たに編成されると、同部隊は歩兵第177連隊として同師団に編成替えがなされ、10月にはアルシャンの南方5000キロメートルに位置する五叉溝で守備についた[19)]。中山隆志の『ソ連軍進攻と日本軍』によると、歩兵第177連隊第２大隊は８月12日朝に五叉溝を列車で出発、昼頃索倫駅に到着し、駅北側で配備につくべく準備していたところ、午後１時30分ごろソ連軍が南方索倫駅に出現して戦闘となり、一旦撃退したが、午後３時過ぎに北方からソ連軍戦車が出現し再び戦闘となり、戦死者若干と負傷者約100名が生じた。これにより午後９時ごろ東方へと後退を開始したが、ソ連軍が戦車を伴って攻撃、大隊は分散して多数の行動群となって後退したとされる[20)]。大石寨は索倫の東南に位置するから、この後退の際に松田は命を落としたのではないかと思われる。

（3）杉浦穆（仮番号84）

杉浦も文科の生徒であるが、西島・松田とは異なり、今回の調査で初めて把握した戦没者である。1943年に入学した杉浦は、『入営者調』によると、1944年10月20日に中部第二十七部隊に入隊し、その後、明確な日時はわからないものの、満洲第871部隊岸田隊に転属となっている。満洲第871部隊は、もともとは1940年に独立山砲兵第12連隊として編成されたもので、まもなく山砲兵第15連隊と改称、満洲の牡丹江省東寧県石門子に設置され、同海城・東安省林口・同平陽と移駐している。1945年３月に国第4907部隊として本土防衛のための内地転用がなされ、４月には宮崎県西諸県郡小林町に到着、そこで終戦を迎えている[21)]。

厚生労働省が近年公表した「～旧ソ連邦及びモンゴル抑留中死亡者名簿～資料未提供者名簿」[22)]に杉浦の名前が掲載されており、これによると旧ソ連の沿海地方のセミヨノフカ地区ブインキ第１分所医務室にて死亡したと推定されている。内地転用の際に満洲に残された兵員の中に杉浦がいたのではないかと考えられる。

（4）善積六郎（仮番号39）

善積も今回の調査で初めて把握できた戦没者である。善積は西島ら一斉入隊組と同時に出陣した、唯一の理科の生徒である。入隊先などの情報は不明であるが、ふすま同窓会の所蔵する『昭和二十年十二月　生徒本籍・現住所・下宿・出身中学調書２　訓務課』に「戦死」と記載があり、戦後まもなく戦死の情報が学校にもたらされたものとみえる。

おわりに

以上、旧制山形高等学校の学徒出陣について、出陣学徒の数など基礎的な事実や個別の戦没者の動向を明らかにしてきた。特に本稿で活用した『入営者調』は、先行研究では十分に明らかにできていなかった出陣後の入隊状況についての情報を含む点で出色の史料であり、入隊した部隊の情報から出陣後の動向を追えることも、個別の事例の検討から明らかとなった。ただし、コロナ禍ということもあって、ふすま同窓会所蔵資料の網羅的分析や、関係者への聞き取りなどについては行えておらず、今後の課題である。本稿では扱えなかった生徒についても追跡調査を行うとともに、ふすま同窓会に所蔵されている旧制山形高等学校の公文書を網羅的に分析することで、基礎的事実の更なる確定と、個別事例の集積を行っていきたいと考えている。

また、冒頭でも述べたように、ふすま同窓会所蔵の公文書の中には、旧制山形高等学校の勤労動員に関する資料もかなり含まれており、勤労動員の実態についても今後検討予定である。

注

1）小幡圭祐編著・佐藤琴編『小白川キャンパスの100年 旧制山形高等学校から山形大学への歩み』（ふすま同窓会・山形大学附属博物館、2021年）にその一部を掲載した。
2）西山伸「第三高等学校における「学徒出陣」」（『京都大学大学文書館研究紀要』６、2008年）。
3）薄田千穂「戦時体制下の高等教育と徴兵：制度の変遷」・同「第五高等学校の「学徒出陣」」（熊本大学五高記念館編刊『熊本大学五高記念館叢書第１集：第五高等学校の学徒出陣』2012年）、同「展覧会記録：特別企画展「五高と戦争－戦時体制下の五高生たち－」」（『熊本大学五高記念館館報』３、2018年）。
4）秋山博志「旧制佐賀高等学校と学徒出陣」（『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』７、2013年）。
5）豊田龍平「山形高等学校大学昇格期成同盟会日誌（並大学関係同窓会日誌）」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』21、2020年）。
6）以上、西山伸「戦時期における高等教育機関の在学・修業年限短縮について」（『京都大学大学文書館研究紀要』15、2017年）。
7）ふすま同窓会八十年記念祭実行委員会出版部編『ふすま同窓会八十年記念写真誌　ひかり北地に』（ふすま同窓会、2000年）145頁。
8）以上、西山伸「戦争末期の「学徒出陣」」（『近代日本研究』35、2018年）。
9）『ひかり北地に』145～146頁。
10）第三高等学校も同様の傾向を示している。前掲西山「第三高等学校における「学徒出陣」」。
11）前掲西山「戦争末期の「学徒出陣」」。
12）加賀谷誠一「「寮雨」「廊勉」」（ふすま同窓会本部六十年祭実行委員会編刊『われらここに聚ふ』1980年、293～294頁）。
13）山形高等学校報告団編刊『報国団誌　創刊号』（1941年）。
14）山形高等学校報告団編刊『報国団誌　第４号』（1943年）29頁。
15）『報国団誌　第４号』64～66頁。
16）塚本哲人「畏友・松田義寿君」（『われらここに聚ふ』307～308頁）。
17）『報国団誌　第４号』45～47頁。
18）満州第二〇一部隊戦記刊行会編刊『満洲第二〇一部隊の悲劇』（1978年）182・234頁。
19）以上、『満洲第二〇一部隊の悲劇』14頁。
20）中山隆志『満洲―1945.8.9　ソ連軍進攻と日本軍』（国書刊行会、1990年）390～391頁。

21）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C12122431700、陸軍北方部隊略歴（その７）内地転用部隊／分割１（防衛省防衛研究所）。
22）https://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/syakai/soren/miteikyou/index.html（2021年12月１日閲覧）。

【謝辞】旧制山形高等学校の公文書の調査にあたっては、所蔵先のふすま同窓会、ならびに佐藤琴・豊田龍平の両氏（いずれも山形大学）に大変お世話になった。ここに記して御礼を申し上げたい。